

コンペティション

Hirowa Takuda

徳田央生



COMPETITION

Illustration

こいでみえこ

コンペティション

徳田央生

Shirawa Takuda



COMPETITION

Illustration
こいでみえこ



ISBN4-592-86093-4

C0293 P590E

ソビエト崩壊前の一九八七年。ロンドンで開催されたピアノコンクールでロシア人ピアニスト——アンドレイ・クライネフ^{トオル・ユキムラ}はかつての恋人雪村亮と再会する。ライバルとしてコンクールを戦いながら、いつしか互いの愛を確認していく二人。そんな二人を、ソ連のKGBがつけ狙う…。雑誌「小説花丸」掲載のクラシック音楽業界をめぐる冒険連作、待望の単行本化！



コンペティション

徳田央生

定価——590円(本体573円)

書店&読者のかたへ：

花丸ノベルズは、花とゆめコミックスなどと一緒に並べられるコミックス・サイズの小説本です。

花丸
novels
ノベルズ

コンペティション もくじ

コンペティション……………11

Last Concerto……………71

天使の微熱……………129

Eternity……………143

あとがき……………207

インペディション

徳田央生



白泉社

作家・イラストレーターの先生がたへの
ファンレター・感想・ご意見などは
〒101 東京都千代田区西神田 3 の 6 の 4
白泉社書籍編集部
気付でお送りください。
編集部へのご意見・ご希望なども
お待ちしております。

この物語はフィクションです。実在の人物・
団体・事件などとは、いっさい無関係です。



徳田央生
コンペティション

1994年5月25日 初版発行

著 者 ————— 徳田央生

©HIROWO TOKUDA 1994

発行人 ————— 麻木正美

発行所 ————— 株式会社白泉社

〒101 東京都千代田区西神田3-6-4

電話 03(3265)1997(編集) 03(3265)1919(販売)

印刷・製本 ————— 株式会社廣済堂

Printed in Japan
HAKUSENSHA

乱丁・落丁本はおとりかえいたします。
定価はカバーに表示してあります。

ISBN4-592-86093-4 C0293

コンペティション

ブローグ

一九八七年六月——生まれて初めて訪れたイギリスの首都ロンドンは、ロシア人のおれから見れば、正に異様な熱気に満ちていた。

イギリス人たちが、かくも熱くなっているその理由は、五年毎に開催される『ロイヤル・アルバート国際ピアノコンクール』、通称アルバート・コンクールの、今年が開催年に当たるからだ。

名声への最短距離と言われる、この権威あるコンクールでの優勝を目指して、五年に一度、世界中の若手のホープが、ここロンドンの『ロイヤル・アルバート・ホール』に集^{あつ}つてくる。おれの訪英ももちろん、そうした野心的な若いピアニストの一人として、コンクールに出場するためだった。

出場者は当然のことながら、ロンドン中がこの一大イベントに湧き返ると言うのは、どうやら噂通りのようである。一次予選が始まってからというもの、というよりはまだ一次予選の段階から、ホールには有望な新人発掘をもくろむエージェントや、明日のアシケナージ、アルゲリッチを見ようという熱心なクラシック・ファンが詰めかけている。

それだけでなく、参加者の名が国籍、略歴とともに全て新聞紙上に掲載され、優勝の行方が賭博の対象にさえなっているらしいと聞かされて、おれはそのいかにも西側的な熱狂ぶりに、苦笑を禁じえなかった。

とくに今年は、いつにない激戦の予感が、ロンドン中を興奮のるつぽに陥^{おと}れているという。優勝の最有力候補に上げられているのは、地元イギリスのヒュー・ウィリアムズ、アメリカのバーバラ・メイヤース、日本の雪村亮^{ユキムラヒコ}、ソ連のアンドレイ・クラインフの四人だった。

ちなみに、ソ連のアンドレイ・クライネフとは、このおれのこと。そして、日本の生んだ天才トオル・ユキムラは、一年前まではモスクワ高等音楽院（コンセルヴァトリー）におけるおれの最大のライバルにして、あの凍てついたソ連の冬の夜を一つのベッドで過ごしたこともある恋人だったのだから、運命とはなんとも皮肉なものである。

おれとトオルとの出逢いは、三年前のプロコフィエフ国際コンクールに遡る。^{さかのぼ}

その年のプロコフィエフ・コンクール、ピアノ部門におけるソ連勢は、まるきりと言えるほど奮わなかった。優勝候補の筆頭に上げられてたおれは、腱鞘炎（しやうえん）にかかってコンクールの始まる直前に棄権していたし、二番手に上がっていたレニングラードの学生は、一次予選のバッハで取り返しをつかないミスを冒して、早くも戦線を離脱していた。

その代わりに、会場であるモスクワ高等音楽院の

大ホールを湧かせたのは、一人の東洋人の青年だった。

第二次予選、ステージの上に雪村亮という日本人ピアニストが現れた時、場内は少なからずざわめいた。極めて東洋的な優しい顔立ちに、どこかヨーロッパ的な優雅な身ごなし……。しかも、コンクール参加者のうち、最年少の十七歳でありながら、彼は一次予選をトップの成績で通過したという。

まだ頬の辺りにあどけなさの残る青年は、なみいる審査委員や聴衆を前にっこり微笑むと、自由曲のショパンのピアノ・ソナタ第一番を弾き始めた。

最初の一音で、トオルは会場にいた、たぶん世界中で一番音楽にうるさいだろう（少なくとも、ロシア人はそう信じている）モスクワの聴衆を魅了した。確かなテクニクもさることながら、彼が生まれながらに持つ、のびやかで華のある音色で。

そして、聴衆の中には、十九になったばかりの、コンセルヴァトリー一の秀才と自他共に認めるこの

おれがいた。

その瞬間……おれは文字通り、トオル・ユキムラに恋をした。

1

六月のロンドン。ロイヤル・アルバート・ホール
の周りは、鮮やかな緑に彩られていた。

「アンドレイ……！」

大きな公園を左に見ながらケンジントン・ロード
をゆっくり歩いていると、突然名前を呼ばれておれ
は立ち止まった。振り返れば、遥か後ろにナタリ
ア・ニコライエヴァがいて、こちらに向かって駆け
てくるところだ。

「アンドレイったら、まだこんな所をうろろして
いたの……!？」

追い付くなり、ナターシャは息を切らしながら、
咎めるようにおれを見上げた。見上げる……といっ
ても彼女が小柄なのではない。おれが、ピアノスト

としては、たぶん規格外にデカいだけのこと。

「まだ、って、ナターシャ、そんなに急ぐことはないだろう？ おれの二次予選は昨日で終わってるんだし、今日は午後の三番目、ミハイルの演奏に間に合えばいいと思ってホテルを出ただけだな……」

年下の美人にきつく睨まれ、おれはしどろもどろに言い訳した。

ナターシャはコンセルヴァトリーの一年生。指導教授も違うので、話をしたのは今回代表に選ばれてからなのだが、何事にもマイペースなおれを見兼ねたのか、この旅行中、彼女は色々世話を焼いてくれている。

「まあ、アンドレイ、あなた何を悠長なこと言っているのよ。午後の一番には、あなたにとつての最大のライバル、あのユキムラが弾くんじゃないの」

その言葉にドキリとして、おれの顔は一瞬こわばった。

今日、これからトオルが演奏することを、おれは

当然知っていた。だからこそ、いつにも増してぐずぐずと、おれは出掛ける時間を引き伸ばしていたのである。

「あなた、一次予選の時も、なんだかんだと言って、ユキムラの演奏を聴かなかったわね」

「……………」

「……………もしかして、まだこだわってるの？ ユキムラがクラスメートだったこと」

どう答えたらいいかわからずに、おれは苦笑した。トオルの演奏を聴きたいのに、どこか心が拒絶している……そんな不思議な感情を、おれはロンドンに來て以来、この胸に住まわせている。けれどナターシャにそれを説明する方法はないし、しかもおれには、こんな時にさらりと嘘を言っただけの才覚もない。

「甘いわ、甘いわよ。ユキムラは短なる留学生よ。留学期間が終われば、その場でライバルだわ。彼はあなたの優勝を阻む、一番の障害物じゃない。ユキ

ムラに勝つために、あなたは何としても、彼の演奏を聴くべきよ」

同志ナターシャはそう力説すると、身長一八八センチのおれの腕を掴んで、足速に歩き始めた。

「ナ……ナターシャ……」

脇目もふらずに前進する彼女を、止めることなど不可能だった。ロシア女性の逞しさをこれでもかと思えつけられながら、おれは彼女に引き摺られるままケンジントン・ロードを横断した。

アルバート・ホールに着くと、審査委員の一人がまだ現われないとかで、コンクールの開始が遅れていた。

会場では、優勝候補のトル・ユキムラが弾くと知って、詰めかけた大勢の聴衆が、演奏が始まるのを今か今かと待ちわびている。

とりわけイギリス人たちは、このロンドン在住の日本人ピアニストが大のお気に入りだったから、彼

の演奏にかける期待には凄まじいものがあつた。

ナターシャはそうした聴衆を掻き分けるように中に入ると、審査委員席の何列か後ろに空席を見付けて、おれをそこへ座らせ自分も隣に腰を下ろした。

「よかったわ。ユキムラの演奏が始めから聴けて……」

彼女は二次予選のプログラムを広げながら、安堵の溜め息をついた。

ナターシャの気持ち、おれにもわからなくはない。今年コンセルヴァトリーに入学した彼女は、トルとは実際に机を並べたことがなく、教授の話や学生たちの噂で、その怪物ぶりを知っているだけなのだ。

三年前のコンクールで、モスクワ市民を圧倒した日本人ピアニスト。彼が二位という成績に終わった時、意義を唱えた審査委員数名が、一位の表彰状にサインを入れるのを拒絶したという伝説の持ち主。しかも翌年、その日本人は留学生としてコンセルヴァトリーにやってきた……。